

冬の楽しみ きらめく星座

2025-1-8 野口幹夫

1) 今年の願い

冬の夜空は長いですが、夕方5時半ごろには宵の明星が現われ、朝は6時でも明けの明星が残っています。今は宵の明星は木星と金星、明けの明星は西空に残る火星です。夜の8時にはオリオン座が南天を豪華に飾ります。

今年の一つ特別な楽しみがありました。それは「昴座」を見つけることでした。昨年の大河

ドラマ『光るきみ』で主人公紫式部の活躍に先行して、清少納言の存在がありました。ご存じ「枕草子」には「星は すばる。彦星。夕づつ。よばひ星 すこしをかし。」と清少納言は星空の景色の第一に「昴」をあげています。(なお 夕づつは金星、よばひ星は流れ星です)

しかし星を眺めることの好きな自分ですが、実は「昴」をまだはっきりとみたことがなかったので、今年こそははっきり見ようと決心して、それを見ることのできる冬空を待ち構えていたのです。



2) 星を歌う

「昴」は清少納言ばかりでなく、世界中の神話に登場し、多くの詩人歌人に歌われました。

なんとといっても谷村新司の「昴」です。カラオケ愛唱歌です。この歌詞何か意味深長ですね。

「目を閉じて何も見えず、悲しくて目をあければ、荒野に向かう道より他に見えるものは無し、ああ 砕け散るさだめの 星たちよ せめて密やかにその身をてらせよ 我は行く 青
白き頬のままで我は行く さらば昂よ」

小学校のころ習った唱歌の中に『冬の星座』がありました。

「ものみな いこえる しじまの中に きらめき揺れつつ 星座はめぐる
ほのぼの明かりて 流れる銀河 オリオン舞たち スバルはさざめく
無窮を指さす 北斗の針と きらめき揺れつつ 星座はめぐる」

アメリカの作曲家ウィリアム・ヘイスの恋の歌に堀内敬三が全く別な意味の作詞をしたものだそうです。

宮沢賢治には自分の作詞作曲の「星めぐり」があります。

「あかいめだまの さそり ひろげた鷲（わし）の つばさ あをいめだまの 小いぬ、
ひかりのへびの とぐろ。オリオンは高く うたひ つゆとしもとを おとす、」そこには
昂の言葉は出ませんが、きっと昂を見ていた違いありません。

星空が詩人の心をいつの世も揺さぶりました。幸せを祈りました。永六輔作詞の

『見上げてごらん 夜の星を 小さな星の 小さな光が ささやかな幸せを うたってる』
また、アニメ映画ピノキオの主題歌は「星に願いを」ですが、その歌詞の主なところは「星

に願いをかけるとき あなたが誰かなんて関係ない 心の底から願えば 何でもきっと叶う」でした。

3) 「昴」発見



さて本論に戻って「昴」を見つけようとして夜空に戻ります、最初にそれらしきものを見つけたのは 12 月初めでした。夜の 7 時ごろ東の空の下の方に ようやくオリオン座が現れ始めて見ることができました。オリオン座

が見えるようになればしめたものです。オリオン座の帯の 3 つ星を延長した先にひときわ明るい惑星木星と、それよりやや小さな恒星アルデパランが並んでいます。その二つを底辺にして長い三角形を創造していくとその頂点に、ぼんやりした星の集団らしきものがありました。

しかし清少納言が「星は昴」というのにはあまりにその存在はかすかすぎます。もう少し先にすればはっきりするかもしれないと 1 月まで待ちました。そして 1 月の 6 日。この日も晴天です。夜 8 時 2 階のベランダに出ました。いつも星を観測するところです。今度は南の空に堂々とオリオン座が輝いています。前回同様木星と恒星アルデパランがすぐ見つかります。しかしその二つを底辺にした三角の頂点を見ようとすると、あにははからんや そこははみ出した屋根に遮られて見えません。そこで下に降りて遮るもののない庭で観察を再開しました。まあなんとその位置は真上です。無理に頭を真上に向けて それらしき位置を眺

めました。それらしきものは感じられます。そこを注視するより少しだけ視点をずらした方が、むしろその存在を感じます。網膜の中心より少しずらした方が暗闇の中のひかりは感じるからでしょう。それにしてもやはり儂く頼りない存在でした。望遠鏡は持っていますが、この



ような真上の星座を観測するにはできていません。いずれにせよそのようなものが今の「スバル座」だったのです。富士重工の乗用車「スバル」のヘッドマークは大きな星アルキオーネとそれに従う 5 つの小星からなっています。スバル座はこのマークを眺めて想像するほかはないのです。

4) 清少納言が見た「昴」

私の星座観測に欠かせないのは持っている PC ソフトウェア「SuperStarV」です。今夜見ている輝く星が惑星が木星なのか火星なのか金星かはこのソフトで確認します。今回の「昴」探索にも活用し、場所を推定しました。これなくしては発見できませんでした。このソフトの良いところは観測する日時を指定できることです。やったことはなかったのですが、ひょっとすると 1000 年前の夜空を再現できるかもしれないと気づき、やってみました。西暦 1000 年ほぼ平安時代の 1 月の夜空を出させたのです。そして出ました。1000 年 1 月元旦の 8 時と指定しました。やはりオリオン座が南にくっきりと出ました。そしてアルデバランもあり、アルキオーネが率いるスバルもわかりました。ここまでは同じでした。そして今と

違うところがあることに気がつきました。それは昴座のある場所の仰角です。1000 年前の昴は仰角 73 度にありました。現在のは 80 度です。庭に出て真上を見上げて首が痛くなる仰角です。では平安時代の 73 度ではどうでしょうか、それは無理なく見える高さにあったのです。地球は太陽の周りを一年かけて回転していますが、回転軸の傾きは同じでなく、わずかながらも歳差運動をしているのです。星座の見える高さも その歳差運動の傾きで変わっていくのだと気がつきました。

今一つ現代と平安時代との違いに気がつきました。それは闇の暗さです。寝殿づくりの屋敷のなか御簾で仕切られた部屋のなかは蝋燭だけでわずかな明かりで暮らしていました。その外の夜空は漆黒であったでしょう。それに今より空気も澄み切っていました。そのような夜の闇の中の星空は今とは想像もつかぬ豪華なものだったことでしょう。

現代の都会に住む我々は、いつでもどこでも光の渦の中にあって、夜空も混濁した空気があるゆる光を反射してうっすらとひかり、「漆黒の闇」は知りようもありません。現代でそれを経験したのは宇宙飛行士です。彼らが船外活動中に ISS の視界を外れ 外の宇宙を眺めた時の「底知れぬ暗黒」にたじろいたといいます。彼らが見た星々こそ清少納言が見た星空だったのです。

一方昴の明るさは今と違ったかどうかは このソフトではわかりませんでした。恒星のひかりが変化することは つい最近の出来事として 2 年前オリオン座でおきました。オリオン座の左肩の星ペテルギウスが急に暗くなったのです。今年はまだ普通に帰っています。暗くなったのは、この星がやがて新星爆発を起こす前兆だと確認されました、10 万年後には

この星は巨大になってその後消滅するそうです。

スバル座は、約6千万-1億歳と若い年齢の青白い（高温の）星の集団です。核融合の反応速度が速いため寿命は比較的短いと予想されています。星団を構成する星の周囲に広がるガスが青白く輝いているのは、星々とは元々関係のない星間ガスが星団の光を反射しているためです。このように昴星団は、安定した恒星とは事情が違うので、あるいは1000年前は、もっと輝いていたかもしれません。

それはともかく、清少納言は、無理に天上を見上げる必要もなく、いい角度に見上げる高さに、まるで漆黒の闇のなかに浮かぶ宝石箱のような青白い光を放つ「昴」を見たのです。

それでなければ枕草子で「星は昴」と第1の宝物とほめたたえることはなかったでしょう。

今宵も星々は、いつもの姿をみせて変わらない姿と思い込みますが、それは小さな人間の浅はかさ、宇宙は人しれぬ営みをはるかなる悠久の変化を遂げながら、人々を憧れの高みにいざない続けます。

終わり